

● 文化

ベルリン、都市と美術館

野村 優子



「ベルリン国立美術館展」チラシ

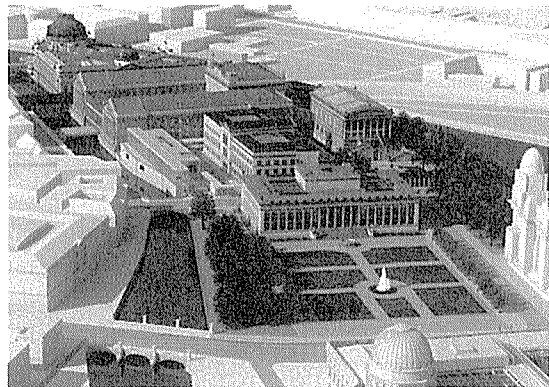
2012年の10月9日から二ヶ月間、九州国立博物館では「ベルリン国立美術館展」が開催されました。フェルメールの《真珠の首飾りの少女》が日本初公開ということも

あり、20万人を越える人々がこの展覧会を訪れています。「ベルリン国立美術館」と聞くと、ルーブル美術館のようなひとつの大きな美術館を想像されるかもしれませんが、ドイツ語表記を見ると「Staatliche Museen zu Berlin（ベルリン国立美術館）」とあり、ここではミュージアムの複数形「Museen」が使われています。大小15の様々な博物館・美術館を総称して「ベルリン国立美術館」と呼んでいるのです。戦前のベルリン国立美術館は、洋の東西を問わずあらゆる時代を網羅して、世界四大美術館のひとつとして称えられていました。

コレクションの形成と博物館島

ベルリン国立美術館のコレクションは、歴代の王たちが情熱と財力を注ぎ、築き上げたものです。ドイツの王室コレクションを話題とする際には、ドイツはフランスやスペインのような統一国家ではなかったということを考慮しなければなりません。ドイツでは地方の君主たちがそれぞれに領地

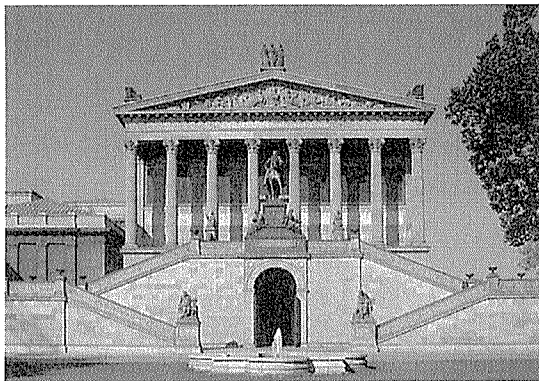
を統治し、小規模な国を築くという時代が19世紀後半まで続いていました。それが1871年に統一され、初めて「ドイツ」という単一国家が誕生したのです。ですから、首都ベルリンの「国立美術館」だからと言って「ドイツ国家のコレクション」を意味してはいません。かつてのドイツには、ベルリンを王都としたブランデンブルク選帝侯の他に、ドレスデンのザクセン選帝侯、ミュンヘンのバイエルン選帝侯という有力な統治者がいました。両者とも大規模な美術コレクションを持ち、ドレスデンには古典絵画館、ミュンヘンにはアルテ・ピナコテークという見事な美術館があります。そもそもベルリンは都市としての発達が遅く、統治していたホーエンツォレルン家も経済的余裕を持たなかったので、美術品の収集に出遅れました。そのコレクションが劇的に充実したのは二人の名君、フリードリヒ・ヴィルヘルム大選帝侯（1620-1688）とフリードリヒ大王（1712-1786）の時代です。前者はレンブラントなどのオランダ絵画を、後者はフランスのロココ絵画を収集し、



博物館島

コレクションの基礎を築きました。これらを基に「ベルリンにも公共の美術館を」という気運が高まったのは18世紀末のことです。経済力をつけた市民層の要請により、「国民の良き趣味の形成」のため、公共美術館建設は始まりました。「博物館島」とは、ベルリン市街を流れるシュプレー河に囲まれた三角州を指します。この中に、旧博物館、新博物館、旧ナショナル・ギャラリー、ボーデ博物館、ペルガモン博物館の順に、五つの美術館が建てられました。博物館島はベルリン王宮の向かい側に位置し、都市計画において美術館が重要な役割を果たしていることが分かります。美術館は新興国プロイセンの国力と文化的繁栄を示す象徴だったのです。

教育機関としての美術館



旧ナショナル・ギャラリー

今回の展覧会には「学べるヨーロッパ美術の400年」という副題がついています。この「学べる」というのは、ベルリン国立美術館にとって大切な理念のひとつです。美術館は開館当初から、美術品を楽しむ「享受」という側面とともに、「教育」としての役割も重視してきました。博物館島の構想を立てたフリードリヒ・ヴィルヘルム四世(1795-1861)は、この島を「芸術と学問の避難所とする」という政令を發布しています。この特徴を良く示しているのは、

絵画専門の旧ナショナル・ギャラリーでしょう。通常「ナショナル」は「国家の」を意味しますが、ドイツ語の「ナツィオナール」には「国民の」という意味合いも強く、これは「国民のための美術館」を目指して建設されています。統一国家ドイツ帝国の誕生とともに強まったドイツ人の愛国心が、自国美術を見直そうという動きを生み出したのです。この美術館の特筆すべき点は、同時代芸術を展示した点にあります。時代は19世紀末、ベルリンにも分離派が生まれ、伝統的絵画を否定する動きが起り始めた時代です。美術館は新しい流派を擁護し、彼らの作品とともにフランスの印象派やポスト印象派の作品を積極的に紹介しました。

ベルリン美術館の危機

ベルリンの都市とともに成長し、百年かけて完成した博物館島。しかし、五番目のペルガモン博物館開館を頂点として、歴史は下り坂へ向かいます。第一次世界大戦敗戦後、世界恐慌により社会不安が広がったベルリンで、ヒトラーのナチス・ドイツが政権を獲得しました。ナチスの思想に反する芸術作品や芸術活動は徹底的な弾圧を受け、表現主義、ベルリン・ダダ、バウハウスなどドイツ国内で発生し、国際的影響力を持つに至った革新的な芸術運動は、国民を墮落に導く「退廃芸術」として活動の場



「退廃芸術展」展示風景

です。急速に発展していく都市のエネルギーが魅力となって世界中のアーティストたちを引き寄せ、現代のアート・シーンを牽引しています。都市ベルリンとその美術館は、重い歴史に屈することなく、これからも進化を続けていくことでしょう。博物館島の五つの美術館を地下で繋ぎ、ひとつの統一体とする計画や、取り壊されたベルリン王宮を再建する計画など、巨大なプロジェクトが現在進行中です。みなさんもベ

ルリンを訪れる際には、街の動きに目を凝らし、そこに息づく芸術を味わってみてください。

2012年9月8日、9月例会講演より

執筆者紹介

野村 優子 (のむら ゆうこ)。
九州大学大学院人文科学府博士後期課程。